西洋道中膝栗毛

十一編 下

へ14
1260
22

門へ 184
獅 1260
巻 22

西洋道中膝栗毛十二編下

東京　假名垣魯文著述

ガタ島の產物へ珊瑚珠多くして及び弥太郎北八の為人いこと色々と繕ゆるく牽出へ帆の上ゆ大利を得んと欲ふ者ゆゑ大欲の異辺思案のヤダごころゆ通注弟をそそのかし風待の間ゆこと人うち連バウテイニヲよりエ陽ゆ行くべき処彼所とうゑ巡りるのゆらエモシ通さん寄時ゆやア日本ぞくも遅くさんごじゆの逆うちゆよりて

八分珠ゞ百歯前後だらら明石西や煙物ゞもやるのも
珊瑚の位ゞ上ッたらの男ひつ紀ゞ子ところゞ尚
の涙山あるやうを安亜買込ンで板金へ指ッて物りや
金の夢を仕込ンでゆくつたゞウンと利ゞりやア
山分ダどうゞ人徒利ッて成夫安く買入ンゞくか
ゝるの者人通ッヂ　そこらハ僕の商ふ物ある筆だ今ふ
異人ゞ持込ンゞ来るから君達ハ黙止ッてくれる
せ人竟商法が実たゞらだ買たゞらず中その

利を計り殺ふ大損ゞ我ふ小利を放るをとりつ
く終ふ大利の基ひをひらくの理だゞら商計セ
遠ゞんを〻ハテせのてハ事を仕そんぎるズット
僕ふ半ゞすゞ〻〻トひとゞ〻〻てのこゝんぞ〻〻
ひ宮ゞ〻ゞやア日本の鬼灯ゞより沢山あるさんゞ〻ぎ
から亜ゞうちハねゝゞんふ相遠ねゝゞ外国人ゞこゝとゞ
ら日本人だとゞゞりやア百文の物を生ゞまゞゞらいゞやア
ふゞだゞうゞらそのつゞりでゞらふさゞねぎゞりたをして

なけりやア買ふものは　なけりやア買はねへぶんが銭ヤア此方の物ハ代物ハ彼方のもんだ　弥「ナイく　むかふから異人がさんざいもを珠数につなげて五六人ゆつくりきたぜなるほどたいそうあかるく　通「いちやうん総掛にあるよシでやらう　トまちうけるところへこゝ人の外国人さんざいもをとめて日本人とあたまりつけんとそのあとすける　異人「トウセルコラル　さんごじゆをあるといふと　通「ホワツト。イスゼ。フライスオフイツト　そのあとぞいくらであるといふこと○　外国人わかりすき　異「テン。セツトコラルイスオフ。テンフアイフドルラルステーキ。イツトオルリーフイツト　このきんごとうくえ　そのさんで十五ドルであるそれをかすともかまはぬともあるといふと　通「ユーアズクオウトオフゼウエト　おまへのいふことをもうすこしまける　アイヘフノツトエキセクテツド　わたしハそんなそらねだんで　異「ゼイアルルオールフイツクスドプライス　それハみなきまつた　さだめのねだんでこざるといふと　チユースゼコロールユーラーイキベスト　おまへがよいとおもふのを　よろしきところをとりなされ　通「トウエドワイス。トウコンサイドル　ふたつとつて　ト弥二郎北八　どうだこのまがいつちいろあひのものが十数で十五ドルだといふが日本の値段なら安イもの

ぎやアねへうち
買いねへと隣ち
北へまハる分をこ
のをあらしでう
度うけあッて
のり北や五分
やア弗の相場が
く陽りやア宮り

も一粒二十あ
粒へとうだらく
こりうく後で
こ思ッて抱くち
てあてたのし
イりやアかゑひ
ちよくあをへ
ハ二
山嶋るんでぎ

弥次
北八の
両個
マルタ
嶋ホ
珊瑚珠
を買ふ
北八
弥次

異人
通次

ゆうとゝ腔イのだぜるんぐとらふとこまぷりうおの異
ン楊めらもと安給金で抱ちくおらくヨ毎日く年間年
中海人発迄ませて雑木どうぜんぶまてゐるさんご樹
もと異械をとりて苦もるく陸へ引上げきしくけ弓連
ぶのし隙をあらもゐ刻むゆふゆまゆーて夢ンだろら
日ヤ相協もと考ちやア安イりんだとろふけまで教ゥ
十ヲで十五ドルるらかく別あいりんぐやアねへまゆ
シざア彼昆の異ものもるくつまらねへかんぐりをして運ふ

もンだろら定例でも利運そそるふのダ自己ゞ月辺ごと
当法ふ五分も遠ゞあるものうそこい三ッ井但や日彩舎
で極行考るるんぐハテどんるりんだエ北そまゞそそら
るら使へうりけ口ざヲヤ見るせ人五分面拾ひゞく
出ゞ出来ささうだゼ考ゆく行るんダ頁ろう
そりゝ大極とゝ吉ヤイく北やその出ゞつらぐ
ふモウ十ヲ買ふと考やうどやアねへう通まゞ七ドル
宝ゞ別合ッて出出ゞ一く

ト通常年間人より十ドルらけ
とゞ出ゞ人ごまるものとひゞ人ふ異人へ

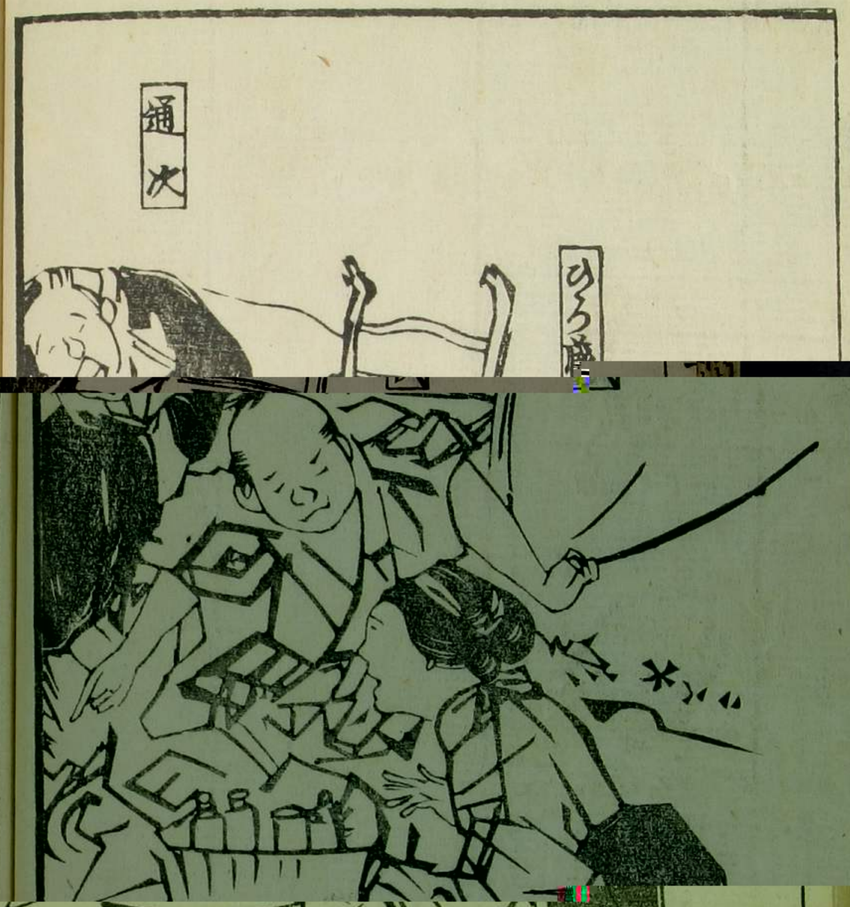
御珠の一件ダガまづざっと四百あふ売れるとうんちく
元金三十あ差引く三百七十あもうかるぶそのあいだ
僕ふ義何よこすつりでゲス〜〜アくそりやアあなたの
よっで実場の相場できめやせう通〜〜イヤそりやアあなた
法ふ相人ことゲス寛角ぶ定約ふ振要だらふ今極
であくもうぶ後日の論ふるくッていかぶ子ぬかもだりふ
まってあくとよくあるやつぶ別ぶ金分で女郎買ふ
行やもソコデ中ふ一人り侠客もきめて立番もちもて来
風ッてまそうら割ぶを集めやうともるとあるく客
易ふやアあつまらね人ぶ果ハ立番もしぶ奴ら破家を
ヲるこことぶまくあるうらそのあぶく後日ふ遠愛の人や
らふもるぶ定理ダマアニ百七十あの利徳の内をいくら
異ンるまる僕ハやだらら洋酒るンぶハ地元ふ成
たくね人うらを件をきめてあるれナント北さんそう
おやアね人ぶ子トいろれぶ徐二郎ハのあ人ものとり一文やーらの百ぶんと
いふもいんだやうるりらまん人るぶらよくのかるハつぶちてお
るるるの通ぶ郎ふあんとうよてやるこころるく行ものと北
ぶるもしてこのだまてとりきめをせぬつりるれハ〜〜そりやアぶ子そう

だらうゞ弥ひさんだゝく自己だッて長の旅を一処ゐもる
おめんゐ對して後日ゐ不実ふ弱迷をとゝもるやうる
心持うを知ゐおめん平常只事ようもはしく附合ッ
てゐるうち大騒きりきろくゐるゐさりそうるゐん
ぢやア ねんうノウ 弥ひさん「ヲヽそうしもく」エモシ
通さんこれうら英吉利へ統ッてサ 犯方ひろ盛もらふも大ゐ法
をとゝく賣ッたり買ッたりしく二月とま年も居
てまうらアタラ海をとゝ亜墨利加へ渡ッてサそこゞく

「サンフランシスコ」の「ニウヨルク」あたりで又一ト為法おこ
ゐ目論だうら先ゐ猿いざうと一年づゝりだらう一年
立ッうちゐやアさんでだゐるの相場だゝくどんゐよりゆ
ゞあるうも右をねんうら今度できめたッてそれゞ定親
ふゐるゐのう子そこをゐうふうらおめんゐ別を出すうも
きゐねんのだうらそんゐこと浅日ゆしてアく一杯とど
ゐゐんハテサ三國者の文句ぢやアねんゞ回年回月回日ゐ
生をぶとこのんども万一舟ゐ愛災ゐりでもゐる時ゐやア

同年同月同日同刻に死ンであもに海へ沈おやアねへか
そんなことゝんどふでもいゝとしておいてこンなせへサア通
さん一寸かさるまとあやせう此牛肉ハなかなかに佳味
ぜ食てごらんく 北「ヲヤ今日ハ強勢にいけヤス子モウ
半分ばかりあがりやく ト両人かはるがはるついせうたらたら に通は弟をとりもちてでならし
かくまでと言う通 にゆういまさと「イヤ酒も肉もモウいけやせんおめへ
がたアおつう僕をであやしつけるく分割を極ねへつ
もりだねはに入ッてハに従へダたとへ日本人どうしで

ならうが外国の旅をすりやア外国流ご西洋商法なら
親睦の区別ハねへのだけさ子たとへ兄弟どうやうに親
あらが商法ハ別組さやア銭金ハ他人ダコレ僕ハ商も
西洋の術数を学ンで航海の在旋に選まれるく来
た男ダエビシの横文一字一点海上の東西南北も分から
ねへおめへがさふに商法の上でこめられちやア天竺
米も食ッちやア通られもねへ口幅ッてへ申ぶんだが十
八の年長崎から外国船へ乗組をしンで横浜の本



時雨
一寸
さゝなみ
月夜
の郎
砂蘭

中間も腹の一処だらくらどうせあらうちゃあろうらねえ
ぶ金があらうちの金ぶく買さきんぐだぶめ人ぶ引
をかけ合ッてもらうたのぶうらそのあいさつ方の縁
まだアヨ日本へ渡ッて来ようもりやア世間並の礼を
まるかうらぶくゆやアあたらねえそれぶうるけりやア
どうでもちるあ人通ッてゆくさ西進のやうる野蕃ゆ
やアト通りの役得ぶやアロるめ人これうら犯方の
耳へ入まて裁判ッてもらうゆやアたるうらねえ人体ッてさんぶん

でもまいぶんぶでも儲ゆあちねえ人通ッてちるくッてどうす
るもんうへ今ゆまんろ丸ッて何ぶどうとしるる通ッてどうした方どう
ちるさト 双方たちあうりてうぶでまうりまぶでゆうまあひゆもるん
ろ藩ゆつぶ〜ッとうくてこちいりひろ〜ッコレサ〜かめ人たちぶどうし
やりまたり三人のゆ人ぶ立ッてうり
たのぶ立合のまめ人もあらうう附るらねえのゆ酒とのゆぶく
ぶうらねえ人うさうらもとでゆうて三所ゆ人ッて附ゆぶうう
いちゆやアねえ人うたして何だるきんぶでちるゆぶどうとうちるさ
とゆうらうゆることだるきんぶでちるゆをどうしたうけダ

マア此方へ來て應對イてそうしなせへト 三人をこつちの室へ
そといちく〜きらかのきんでおめをとひろ〜 [illegible]
ざうかりまふとうりゆげらくうえそで [illegible] 「コレ〜これだから人
ダたの異鬼ゆやア国々のダチイ此きんでおめをおめ人衆
実物だとおふのうト 金皇の [illegible] ぎやつとせう〜ろき 弥「モシ〜親方
そこそりやアわく〜わんりのおやアでごぎりやせん
う子 ひろ「ハヽヽわん物どこうこりやア丸太嶋ぐ他
国の人とおんるとおッうぶせふかるきんごとの儒
物ダ 北「ヤアヽ〜そこそりやアたく大變ダ強ぼまん

ドミこくおせとうく 弥「ナント親方此紙をちよつくら
丸太嶋の人を西へつけらくめらうまくつめやアいなす
め人の 北「エ モシ親方どうかおめ人さんの御威光で子 ひろ「弥
をたまけことゝもといふのダナ丸太嶋から百里ほど
紙をとめどせとれ家でも遠ッたのかだらく あいト
いかまでおめ人をたのむとかきつくさきしあつむゆてうわいろ青ざめ [illegible]
まうでおきふ家き兒二十ドルの大金をとらしまひたるふ諸ぬけにして [illegible]
ろくるのよ兒ぐむを通辯者ハ知てころぐいくすゆ恤てことおゐかまと通
よげふたろうで家たりをとうんおろしまぐらせてらわとうひく 「モシ
親方僕の冊那殊なんぞの經定は一向すのんぐゲスが

弥次さんと北さんがるんぐるも買いてうまろと
のむものぐゲスうらよんどころなく價の
いちやーたぐ値をあてぐぶとわかでなる張ぐ
ゲス子ひろ〳〵イヤあとうとぐとまるとまた奴よりう買うふ
方があぐ紀サるんぐやさんでぐ為山あるたち
いッたッうと十あうらまる隙をこ分うきん他だと
きだうら外国人がおッうぐあせられるのぐうあぐうふ
マルタ島るんぐどあるさんごどのかぐあだそしうく
いッても遊てた
かーひた

甚吉刑の為官ぐ学びろうら表金をしてと
の者のを小波さぐ引あげく者ろうこと
者だうらろくる珠いありやア者ね人者ど品
でもるんりのるうちつとの虫歩いあるけまぐの品
珊瑚珠が何ぐ貝を孫磨あげて洞毛をとりやア
ら日本の鳴石玉より虫歩ね人ハナそしてこ
出〳〵たとりあぐ何処を目的が買イ込ンだ
三ヶあうと客人だぜそんること者やアこまうこ

他品
品の
二十ドル
ざホン
英吉利

秋街花題
通次郎
弥次
供七

玉のよる
月のよる
美酒
商吉
北八

の事ばかりあめりかの國へ渡って外国人と
交際ッて実
際をあらたら初住方あるもたり
限りハ志を和人ゼヒ、コウ弥次さん北
ぐ高法の教古をしたとあるなら和人も三十どる
とるもゝ和もるら和人始めごとトとなるがいろホンニ
むぐめてゆめのさめくるごとくさりるぐらたが
のまたちがおろかさらおろもまもしてまのろ
ひまごとうけおひうましさのあのことなる者
こころのちちの通そらもとあくとらこそたらこそ
も今とるくちやアあろくぐごぜんせんぐれ
ぜんてん

マルタ島ゆきんごぶりあるうね人うそん
中でゆくこのを通さんが知ッたぶりど体
ンだくくツイ上陸くくるきみるッたのぐ
北そうサ〳〵生長法大きずのりことたち
西洋のことと学ぐぐッてること西洋くらこぜんやも
やうるるらを使もんだくらん人まごくんこ
るのごこの損ハ者分通さんを使ッてりらハ
ありやせん通るんだと二十分も和人ぐやら

そんなねつぐ〳〵ふうまるを子たち人僕ら者〳〵をし
やうとも思ふ人うつぐ者のねへさんごまるをもりゐ買
ひつゐ世人と初でもちやア者ゑ人〳〵一体おゑ人ぐ〳〵ゐ出人
まつてうるつもゐ欲張ろくゐるうら指とまつこのだ事
さうれまうらうでも欲どッても大きゐ思せ話よ者ゐ
へのだゑゐやアるうらねへ人ヨ通「だまぐそんゐのだゑを
引ちける習接ゐ出るものろ弥「習接たアぐれぐこ
ッた通「イヤサそんるやッけへをひれちける人のこ

ことをいふのだヨとうらねへ中間ダ北「ナニはとんちれめ
通「ゐんたとうぬつゐやたぐひふけ〳〵れをえひろ「これサ又う
どうしたのんぐ通さんおゐへゐも似合ねへ相をゐまるる
きまるうらむうふの孤高へぐくも上陸て死ゐあふとも食
ゐやこも係をゐ去るゐ世人弥次さん北云ゐきのいッた
ゐけんぐうろうらねへぐくゐまぐ彼是いふるうらモウ〳〵おゐ
へぐくゐやアたび〳〵こうてゐるうらを切レ金だとゐッて
おまぐ三十ドルやるうらはされの「ジブラルタル」といふことなと

へ上陸ンるの世人を知らら日本へ仮舟をたのンでゆーて
ちるうからそうきあるぶらつだろっつらる人たちダトるの
うちらたちのやうもふあ人ト ちぐそおそを入ってさゆぐ ふりどびるふさ
もぐ通ぢ帝もいさろひをちくさりのくのしとろりのコンペイ二ゆるるきのぐく
ゆるりそのるもびあ人のこびこともるしけるふひろざろいおさゆう
ぐつぬあ人りぐころろぷくのけーきをけんをたるこるをださろそくき
紀入生あ人ぐをんるうのまきんをつくのひるーゆ人語こぐ北八いられひ
のるろのよるろこびゆて ちよじぬけめるのたひろぐろぐろらのふうんぶく
ちるわくきいをの人通ぢ帝このゆるるとそ弥ぢ帝とるあへぐ
そのぐをちりぐそれかのくのおまふきるりく弥ぢ帝とるあへぐ

えめられく 珊瑚 珠 ぐな血の涙
ちぐりもあへぬ身のあぶらかるの

北八もちぐしかんぐ

白
さ紀の目ハ黒こ協るをちるうとく
黄
見迷ろくさあた米玉青いきさ

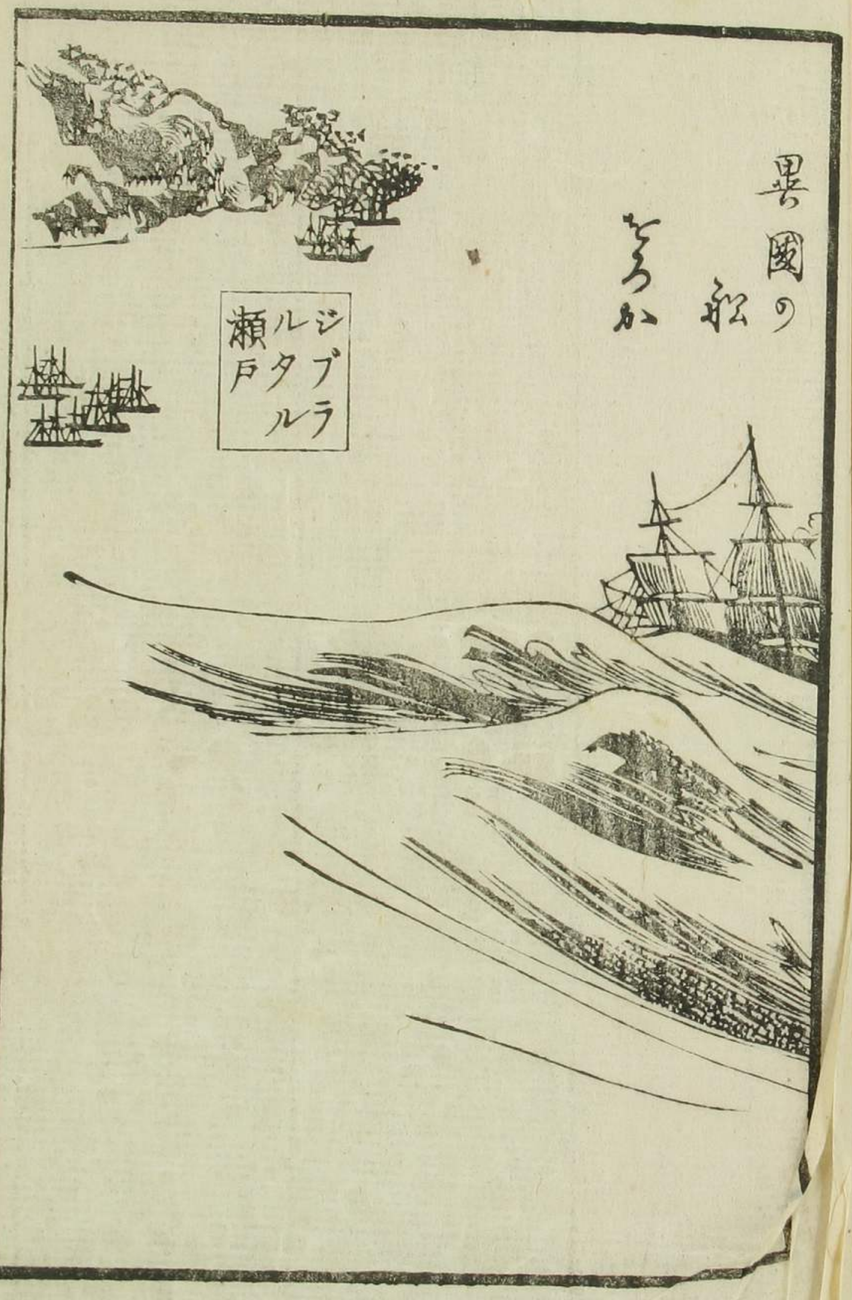
通 アハくく十五ドル損をちたゆーちやア秀逸 弥 ナン
ト私宮の杆ハ一寸ハつぶしやもぐ迷ふふまるるらゴムの
宮や澤鞠るんぐよりもそやうサ子 北 ふくまてもふく
きぐへハちねへ十ぶぐるハ紀方ガ捏てくれたぐ海の十五ドル
ハ京 幡沼ダ 通 イエサそりやアうるるくぐらめべうらず損ハ

徳の基ダこれら悟覚舎といふ大徒あるし二番目い
ありかの大舞台でカリホルニヤの山を掘って金銀
若干を得る策ぐありやせう伺ンの十あどるやこ十弗
風説のやうるのんでゲス弥「ふうぢんふ的徒でまる
たちんぢの辻占ッ子北「ちんぢの犬ぐ手ぢり強くッ
くも納まらねへ弥「若しこれふこりョでしのちいう
つうりわい買ふめんせ辻方とこらのやうる奴だらう徒
見世で反物を買ッて家へ帰って安直ぢるめんをして羽

羽丈をきして見ると八尺ぢりるるッたり古本をと安く
買ッて候ンでえんると義丁だらけサ北「安物買の銭失ひ
い昔ッうらあるやつだぐこと三の家中や水びたし〜引
かるのぐ今でもたるふやアあるそうダ通「ダが我ふもは
三四年以来日ふ開化ぐ進むもので猿の仲を熊の銭だと
云ッて田舎同者をだま〜たり通連ふるッて合巾をし
て拳や碁将棋ぐ金をとむさぐる銭をかるるたく
ととをする名者ぐるくるッたら実ふ育ぐくインけ

○蒸氣飛脚船入津
祝砲之合圖

異國の
船
ながめ



サ志し油断大敵身の用心ゆきくいるゝしサ子弥十二サ
毒法ゞさんふるりやアコセ〳〵盗賊るんぞをまる奴
いるくなるまとろダ通そこゞ開化とも開知ともいふのゞ
ゲス此ふらっちも開知とろ異紀とろの道をまいく
ゞまどひをしてさんゞ者の偽物るんぞをまもし
こゐ和人やうふるんとろの毒法をこゝろゞけやう弥て
迷人やあらア敬い人盗だゞナットそゝッもしい敬だらひ
さ志ー遠へやゞ迷ひまるのダこをうら義付イく敬

張らうゞ北ふ家ふ叢湖とゝ言麻ゞありやもあらっちの
い島麻だうら敬戦まるのダ弥ナット玄関ゞもンだら敬
ゞろふゆざんざらとゆふまちやもう北まこをふまやれと
うゆらひけるポシく通アイくこいろいらト贅言ふ出刻
の不敬も忘まて共ふ笑ひを僅ーけるうち私い注弟
ふ題中海を更ーと進を行その入口るシブラルダル
の海戸を目的ろ乗入りつ岩を示を祝砲ふ大人乃
眠りを覚ーけり○ストンドロ

作者魯文看官へ謹こで告條

當編初輯より引続き御高評あめぐり三都府ハ勿論なり外客もら愛翫〳〵國語國文共ゐ我国と〳〵らゐめ通ぜ〳〵徒ら坐辺ゐ置らざるいなる〳〵と聞けり作者の面目何事ゝら是ゐ不如ばけん遮莫英國博覧會をもりて大團圓とせゆく欲す閑場よりの腹稿なるもゞ第十五編ゐ結局せん目論なり然りと雖も北亞墨利迦洲なる合衆国ハ方今ノ五大洲中有名無二の富國よしを其大都府華盛頓サンフランシスコ「カリホルニヤ」「ニウヨルク」なんど繁盛殊ゐ勝もりと聞めのから此編十五輯の結局ゐ拾遺〳〵を

亜墨夜話 西洋膝栗毛拾遺 初編

如此〳〵表題を設け著述の腹稿意中ゐ収めり當編ら彼國へ航海せ〳〵友人の紀行を借得ら〳〵目前の滑稽ゐ僕ゞ拙作の恢諧を潤色ら〳〵たもゞ佳奥をしら〳〵

深くるべき小冊子なり當年此編の結局發兌を待ぢ
ちゝ神速に著述の功を奏し引続きつゝ出板せん
く欲せば大方の花主右の表題を暗記ぬひく不相変
御求高覽の程一偏る冀望し奉る條を粹客萬笈
閣主人と共に希ふ

西洋道中膝栗毛十一編下之卷了

老實伏熹
御花主様方より安く
御きげん能恐悦至
極つゝん〳〵奉り隨つて
私店ゆゑ製本仕い西洋
膝栗毛の義日わは繁昌仕り有がゝ
仕合ゆ存奉い扨作者魯文申候ハ只
今すで無益の戯作ゆ日月てゝ
候事閑化の御治世ゆ恐いり奉い
次第こうき聊ゝ御国益ふゝ相成るゞ沢
小冊と著述仕り候と左の目録持参
致ゆ付早速注文仕い間出板の節御永
御高覽のゞど相
[illegible]ら奉願上候

假名垣魯文著述目録近刻裁兌

世界都路 五卷 百化物産 西洋器會 初編

女洋學道案 全 横濱往来 全

訓蒙倭リードル 全 洋學進書 三卷

洋名漢字通 全 通俗下情博覽 二卷

英語いろは部類 全 刻苦勉強論 二卷

東海道中膝栗毛 中本 全十八冊 木曽道中膝栗毛 中本 全廿五冊

萬國航海西洋膝栗毛 中本 全三十冊 奥州道中膝栗毛 中本 全十五冊

亞墨夜話西洋膝栗毛 拾遺 近刻 滑稽五十三驛切 付 全十冊

東京書林 本石町二丁目 椀屋伊兵衛 椀屋伊三郎 椀屋喜兵衛